

宇治拾遺物語の語彙と文体

——古事談との比較を通して——

一 はじめに

中世の文体には、片仮名を用いるものとして、『平家物語（延慶本）』や『太平記』などのように漢字を主体とする文体や、『方丈記（大福光寺本）』のように片仮名を主体として漢字を交える文体があり、和漢混淆文の系統をなしている。これに対して、平仮名によるものは、中古の和文体から変質したもので、『徒然草』のような擬古文とよばれるものや、『宇治拾遺物語』のように和文体を継ぎながら和漢混淆現象を含むものがある。片仮名を主として用いる系統では、片仮名表記を用いる程度や漢文訓読の影響にも様々なバラエティーがある。これに対して『宇治拾遺物語』のように平仮名を主とした文章では、表記法は中古の和文体に近い傾向を見せるが、漢文訓読語や漢語をも含んでいる。片仮名による文章の系統に比べて、

藤 井 俊 博

これらの漢文訓読調の要素は少なく従属的なものと言えるが、これを中古の『源氏物語』などの文章と比べると漢文訓読調の要素は必ずしも少ないとは言えず、むしろ、一定量の漢文訓読調の要素を含む点を特質として捉えることができる。中古の平仮名文は和文体の文体に対応するものであったが、中世の平仮名文では、語彙・語法の面では漢文訓読調の要素を多く含むものが出てくる。桜井光昭氏は、このような表記法と語彙・語法の観点を総合して文体をとらえる立場から、『宇治拾遺物語』のように和漢混淆現象が見られる文章（言語作品）で、しかも、中古の和文体の表記法の体系を有する文体を「中世和文体」と称することを提唱された。

和漢混淆現象そのものはすでに上代の宣命や『万葉集』の一部の和歌などにさえ見られ、古くから普遍的に見られる現象であるが、中古以降の平仮名文で書かれた和文体の作品に漢文訓読調の要素が^①

ある場合、これを用いる理由は様々な面から説明できるであろう。たとえば、和文的な性質が強いと思われる『源氏物語』でも、僧侶や博士などのような男性の漢文に馴れた人物の会話文に用いる事例^②などが指摘されているのは顕著な例の一つである。しかし、男性作者による『竹取物語』、『宇津保物語』（俊陰巻）、『土左日記』などの平仮名文で、地の文で漢文訓読調の要素が用いられている理由については、種々に検討していくべきであろう。

桜井氏の言われたように、平仮名文の表記体系が和文体の文章に対応するものであるとするなら、平仮名を主とした『宇治拾遺物語』に漢文訓読調の要素が混入するのはいかなる理由によるのであるのか。右に挙げた中古の作品群と異なり、『宇治拾遺物語』の場合はいくつかの出典を編集してできた説話集であるため、その中の漢文訓読調の要素が、出典となる文献からの影響によるのであるか、编者独自の表現によるものであるかということが問題になる。本稿で比較に用いる『古事談』は、益田勝美氏^③によって出典の一つとして確実視されるようになったもので、片仮名書きを適宜含むが、語彙・語法の点では典型的な変体漢文の要素を持った文体であり、漢文訓読調の要素に影響を与えたことが予想される。『宇治拾遺物語』において、『古事談』という変体漢文の文献を平仮名文の和文体に翻案するに際して、いかなる文体の変換が行われたのであろう

か。『宇治拾遺物語』は変体漢文から和漢混清文が生み出される一つの例として、格好の材料を提供する例として考えられるであろう。本稿では、『古事談』と『宇治拾遺物語』の用語を取り上げ、右の点を検討したい。

一 古事談から宇治拾遺物語への翻案

山岡敬和氏^④は、『宇治拾遺物語』の文体が『古事談』をいかに翻案して成立したかについて、「漢文訓読文・記録文で使われる語句、表現を和文体の語句、表現へと書き改めており、この改変は各話に重複して見られる」、「宇治拾遺編者は、『古事談』における漢文表現の難解な箇所に関して、徹底した削除・簡略化を試みて、和文体の文脈に取り込んで、新たに再生しているのである」と述べた。

さらに、桜井光昭氏^⑤は、山岡氏の挙げた例に対して、「あひだ」のように、『古事談』の表現を受け継いだ記録語の表現があることや、独自に漢文訓読調の語法である「して」を使用していることなど、和文化的傾向には例外があることを指摘し、説話によって漢文訓読調と和文調が様々に混在していることを指摘している。ただし、桜井氏の論においては、出典の影響についての考証は本格的になされず、部分的な指摘に止まる。本稿では片仮名混じりの変体漢文である『古事談』を出典とするものを取り上げて、両書の表現の

対応箇所を取り上げ、漢語や変体漢文特有語・漢文訓読特有語がどのように翻案されているかを検討していきたい。

なお、『宇治拾遺物語』は岩波新日本古典文学大系本、『今昔物語集』は岩波日本古典文学大系本によることとし、『古事談』の漢語の認定ならびに本文の引用については小林保治校注『古事談 上・下』（現代思潮社）を用いた。その他の作品の用例の有無については、宮島達夫『古典対照語い表』を手がかりとし、『万葉集総索引』（正宗敦夫）『九本対照竹取物語語彙索引』（上坂信男）『伊勢物語総索引』（大野晋・辛島稔子）『大和物語語彙索引』（塚原鉄雄・曾田文雄）『土左日記総索引』（日本大学文学部国文学研究室）『かげろふ日記総索引』（佐伯梅友・伊牟田経久）『枕草子本文及び総索引』（榎原邦彦）『宇津保物語本文と索引』（宇津保物語研究会）『源氏物語大成 索引篇』（池田亀鑑）『三宝絵自立語索引』（馬淵和夫）『紫式部日記用語索引』（東京教育大学中文学部研究会）『更級日記総索引』（東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾）『校本大鏡総索引』（秋葉安太郎）『浜松中納言物語総索引』（池田利夫）『栄花物語本文と索引 自立語索引篇』（高知大学人文学部国語史研究会）『方丈記総索引』（青木伶子）『徒然草総索引』（時枝誠記）『平家物語総索引』（金田一春彦・清水功・近藤政美）『CD-ROM版 平安遺文』（東京大学資料編纂所）『古本節用集六種研究並びに総合索引』（中田祝

夫）に依った。

【漢語の踏襲】

まず、『古事談』の漢語がそのまま継承されたものをあげておく。『古事談』で用いられた漢語が、『宇治拾遺物語』の対応本文でそのまま踏襲されたものの多くを占めるのは具体的な人や事物を表す名詞の類であるが、紙数の関係で、ここではサ変動詞や、動作性・状態性の意味を含み持つ名詞に限って挙げることにした。（かつこ内の数字は新日本古典文学大系本『宇治拾遺物語』の説話番号）

不食（六〇）、加持す（六一）、蘇生す（六一）、安置す（六三）、御感（六六・一一六）、誦す（六八）、談す（六八）、修す（六九）、請す（六九）、数刻（一一七）、啓白す（一一七）、会釈す（一二五）、子細（一二五）、無礼（一三五）、建立す（一八四）、呪唱す（二八四）、御覧す（一八八）

これらのうち、中古・中世の平仮名文の和文体の作品において見られるものが大半を占める。

「加持す」（蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記）、「誦す」（枕草子・源氏物語）、「談す」（徒然草）、「修す」（徒然草）、「請す」（大鏡）、「会釈す」（浜松中納言物語）、「子細」（源氏物語）、「無礼」（源氏物語・大鏡）、「建立す」（大鏡）、「啓白す」

(『栄花物語』)、「御覧す」(『竹取物語・蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡』)

また、この他のものでも、「蘇生す」が『三宝絵(観智院本)』、「安置す」(『方丈記・徒然草』)、「御感」が『平家物語』、「呪咀す」が『三宝絵(観智院本)』など、漢文訓読調の要素が多く混じる、中古・中世の資料に範囲を広げると用例が見られるものがある。

なお、「不食」「数刻」はこれらの作品にも用例が見出せないが、「不食」は『饅頭屋本節用集』に、「数刻」は『明心本節用集』、『天正本節用集』、『黒本本節用集』、『易林本節用集』に掲載されている。この二語は例外であるが、その他の『宇治拾遺物語』で踏襲された漢語は、和文体や和漢混淆文体において見られるものと言える。

【漢語の翻案】

次に、『古事談』の漢語が『宇治拾遺物語』で別の語に翻案された場合をあげる。これには和語に翻案される場合と、別の漢語に翻案される場合がある。なお、ここでは人物や事物を表す名詞も含めてあげる。

① 漢語から和語へ翻案する場合

これは、さらに、A 逐語的な翻訳の場合、B 漢語の一部の要素をとる場合、C 別語に置き換える場合、に三分類することができる。

A 逐語的な翻訳の場合

無双(↓ならびなき) 六四

死者(↓死ぬるもの) 六七

参向(↓参りむかひて) 六七

乱入(↓入乱れたり) 一一七

路傍(↓路のかたはら) 一三五

懐紙(↓懐より紙を) 一八四

B 漢語の一部の要素をとる場合

参詣(↓参りける) 六〇・六四

転読(↓読たてまつりたる者也) 六〇

及死門(↓死なんとす) 六〇

女房(↓女な) 六〇

「女房」は『蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・更級日記・大鏡』に例がある。

来臨病室(↓来れり) 六〇

病僧(↓此僧) 六〇

造立(↓作れる) 六三

依微運(↓運おるそかにして) 六四

過分之(↓身に過たる) 六四

祈請(↓祈申に) 六四

- 後日(↓後に) 六五
 - 御寝(↓御とのごもり) 六六
 - 不覚悟(↓おぼえざる) 六六
 - 魚肉(↓魚) 六七
 - 下向之(↓下る) 六七
 - 魚味(↓魚) 六七
 - 後日(↓後には) 六七
 - 使者等(↓使) 六七
 - 帰路(↓帰るに) 六八
 - 末文(↓末の句) 六八
 - 他事(↓こと事) 六九
 - 数輩(↓その数) 一一七
 - 任国(↓国) 一三五
 - 下向(↓下ける) 一三五
 - 老翁(↓翁) 一三五
 - 愚父(↓父) 一三五
 - 寺門(↓門) 一八四
 - 罪科(↓咎) 一八四
- C 別語に置き換える場合
 体(↓ありさま) 六〇

- 普通事(↓うちまかせたる事) 六〇
 - 不廻時刻(↓程なく) 六〇
 - 寵愛(↓思はれ参らせて) 六〇
 - 卒去之(↓死「ぬ」る) 六一
 - 遺言事(↓いひを「お」くべき事) 六一
 - 数体(↓おほくの) 六三
 - 窮屈シテ(↓くづお「ほ」れて) 六七
 - 疾病(↓系「え」やみ) 六七
 - 難(↓事) 六七
 - 子細(↓よし) 六七、(↓かゝる事のあるはいかと) 一八四
- 「子細」は、踏襲でも挙げたように源氏物語に例がある。
- 引率(↓おこして) 六九
 - 所作(↓する事) 一一七
 - 賊徒(↓盗人共) 一一七
 - 有御出仕(↓まい「ぬ」らせ給けるに) 一八四
 - 毎日(↓いつも) 一八四
 - 白状(↓語「かたり」を) 一八四
- 以上のように、漢語から和語に置き換える場合は、漢語をそのまま踏襲する場合に比べて多くの例が見られる。もとになった『古事談』の漢語は、『源氏物語』などに見られる「女房」「子細」などを

除けば、中古の平仮名文の和文体作品には見られないものである。

これらは、『宇治拾遺物語』で踏襲された漢語と性質が違い、和文では一般的でないものと思われ、山岡敬和氏の指摘されたように、『宇治拾遺物語』では、漢文訓読臭のある難解な漢語に対しては、平易な和語に置き換えようとする態度があることが窺える。

②漢語から別の漢語へ翻案する場合

八旬(↓八十)六〇、氣(↓けしき)六〇、制止シテ(↓制止)一三五、引率(↓具して)一三五、施術(↓呪咀)一八四、御見物(↓御覧)一八八

『宇治拾遺物語』で用いている「けしき」(竹取物語・伊勢物語・古今集・蜻蛉日記・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡)、「制止」(竹取物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・大鏡)、「具す」(竹取物語・伊勢物語・蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡)、「御覧」(竹取物語・蜻蛉日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡)はいずれも和文体の作品にも用例が見られるものである。「八十」と「呪咀」(観智院本三宝絵にある)を除けば、一般の和文体に見られるものと言える。

【和語から漢語への翻案】

『古事談』で仮名書きの和語を用いるものを、『宇治拾遺物語』で

は漢語の形式に翻案する場合をあげておく。

キコエムトテ(↓の料に)六九、マメ(↓大豆)六九、ケタミテ(↓気色して)一八八

「料」は、もともと「目的・用途に合わせて用意した材料」の意味で、『竹取物語』・『枕草子』・『源氏物語』など中古の平仮名の和文体の作品に用例があり、「目的」を表す例も『大鏡』などにおいて見られる。「大豆」は、和文体の資料には用例は見出せないが、『正倉院文書』・『和名抄』など、古い時代から用例が見られる。『古事談』でも、同じ話で「大豆」と「マメ」を併用しているのを、『宇治拾遺物語』では「大豆」に統一したのであろう。また、『古事談』の「ケタミテ」は、貴人に挨拶をするという意味で、『古事談』以前に用例が見られず、『義経記』・『運歩色葉集』等に見られる中世の俗語と思われる語であるため、中古から和文体に用いた「気色」「けしき」を継ぐ「気色」「きしょく」してに翻案したのである。

【助詞・助動詞の翻案】

漢文の助字にあたるものを翻案している箇所を上げる。

(助詞) 於(↓にて)四・六七・一八八、雖(↓とも)六〇、哉(↓ぞ)六九・六九・一三五

(助動詞)不(↓で)六〇、如(↓たてたるやうにて)六〇、不異(→の)六〇

助詞においては、『古事談』の用いた漢文の助字に対して、漢文訓読調の「において」「といへども」「かな」などのような直訳的な表現を採らず、いずれも和文的な語法に翻案していることが窺える。

助動詞でも、「不」「如」を、「ずして」「ごとし」とせず、各々「で」「やうにて」と和らげて翻案しているが、漢文訓読調の「ごとし」のみは和文体においても少数用いられる語法として、「不異」の翻案に用いているのが注意されることである。

【変体漢文特有語の踏襲と翻案】

令(給)↓せ給ふ(九(3例)・六〇(2例)・一八四、
間(↓あひだ)六〇・六四、間(↓)一八四・一八八、
處(↓所に)四(↓処に)六七

変体漢文特有の「令(給)を(しめ給ふ)」と直訳した例はなく、「せ給ふ」(九に3例、六〇に2例、一八四に1例)の翻案が多く、和文文化の方向が窺える。他に「給ふ」(一八四に2例)、「おほしめす」(六〇に1例)、「せおはします」(六四に1例)、「敬語省略」(一八四に1例)で翻案する例がある。

「間」はそのまま「あひだ」とする例が3例(六〇に2例、六四

に1例)あり、他に「に」とする例が3例(一八四に2例、一八八に1例)見られる。「處」は「ところ」とする例が2例(四と六七に各1例)あるが、「已然形+ば」に翻案する例が3例(六六に1例、一八四に2例)、「程に」に翻案する例が3例(四に2例、一八八に1例)、「時に」に翻案する例が1例(六〇)ある。「間」^⑤「處」の接続助詞的な用法は変体漢文に源があると言われているが、『宇治拾遺物語』ではこのような様々な翻案形式によって変体漢文的な用法を和らげようとしたのであろう。ただし、別の表現に翻案をせず、「あひだ」「ところ」をそのまま接続助詞的に用いた例もある。まず、「あひだ」は、「時・うちに」などのような時間を指し示する用法もある(『古事談』を典拠とする例では四・九・六〇・六九・一〇三・一三四)が、次のように「」で「から」と解せる接続助詞的な例が、『古事談』を典拠とする例に見られる。

此女房を見て、欲心をおこして、たちまちに病となりて、すでに死なんとするあい「ひ」だ、弟子どもあやしみをなして問ていはく、「この病のありさま、うちまかせたる事にあらず。」

『宇治拾遺物語』六〇(

見此女房発欲心忽病成、已及死門之間、弟子等成奇問云、比御病者、かしらもそらで年月を送たるあひだ、ひげ、かみ、銀の

病體非普通事…

『古事談』一九一(

針をたてたるやうにて、鬼のごとく、(『宇治拾遺物語』六〇)
 病者不剃頭、送年月之間、鬢髪已銀針、其陣不異鬼形。

(『古事談』一九一)

前者は、日本古典文学全集(小学館)のよつに「たちまち」死の
 うとするので、弟子が不審に思つて」と解され、後者も「頭を剃ら
 ずに年月を送つたので、鬼のようである」の意味に解される。

次の「ところ」の場合でも、『古事談』を典拠とする例で、接続
 助詞的「〜すると・〜したところ」の意味の例が見られる。^⑧

善男、おどろきて、よしなき事を語てけるかなとおそれ思て、
 主の郡司が家へ行向ふ所に、郡司きはめたる相人也けるが、日
 来はさもせぬに、事の外に饗心して、わらうたどりで、

(『宇治拾遺物語』四)

善男ヲドロキテ、無由事ヲカタリテケルカナト恐思テ、主ノ郡
 司宅へ行向之處、郡司極タル相人ニテアリケルガ、日ゴロ八其
 儀モナキニ、事ノ外饗心シテ、円座トリテ、

(『古事談』一四九)

その辺の在家をしるしけるに、我家しるしのぞきければ、たづ
 ぬる処に、使のいはく、「永超僧都に魚たてまつる所也。さて、
 しるしのぞく」といふ。

(『宇治拾遺物語』六七)

在家ヲ注ケルニ、我家ヲ注除ケレバ、問子細之處、使者等云ク、

永超僧都贄立之所ナリ。仍注除之云云。(『古事談』二五九)

これらは、和文体を基本とする『宇治拾遺物語』が変体漢文特有の
 語法をそのまま取り込んだ例として注目すべきであろう。

【漢文訓読特有語の踏襲と翻案】

次に、漢文訓読特有語の「いはく」の使用状況について、『古事
 談』の「云」を踏襲して「いはく」を用いた場合、『古事談』に対
 する増補箇所、「いはく」を用いた場合、また、「いふやう」が増
 補箇所や、『古事談』の「曰」の翻案に用いた場合に分けて用例を
 あげる。

(踏襲の例)

妻のいはく、「そのまたこそ、裂かれんすらめ」とあはするに、

(『宇治拾遺物語』四)

妻云ク、ソノマタコソハサカレンズラメト合ニ、

(『古事談』一四九)

郡司がいはく、「汝、やむことなき高相の夢見てけり。それに、
 よしなき人に語りてけり。かならず、大位にはいたるとも、事
 いで来て、罪をかぶらんぞ」といふ。

(『宇治拾遺物語』四)

郡司云ク、ナンチハ無止高相ノ夢ミテケリ。而無由人ニカタリ
 テケリ。カナラズ大位ニハイタルトモ、定依其徴不慮之事出来、

有坐事歟云。

『古事談』一四九

心誓僧正に祈られんとて、召につかはすほどに、まだ参らざるさきに、女房の局なる小女に、物つきて申ていはく、「別の事にあらず。きと目見られたてまつるによりて、かくおはしますなり。僧正参られざる先に、護法さきだちて、参りて、追い「ひ」はらひさぶらへば、逃をはりぬ」とこそ申けれ。

『宇治拾遺物語』九

心誓僧正ニイノラセムトテ召遣之程ニ、速参以前女房局ナル小女ニ物ツキテ申云ク、非別事。思、キト目ヲ依奉見入如此御坐也。僧正不被参之前、護法前立テ参テ、追拂候へバ逃候トコソ申ケシ。

『古事談』二五二

弟子どもあやしみをなして、問ていはく、「この病のありさま、うちまかせたる事にあらず。おぼしめす事のあるか。仰られずは、よしなき事也」といふ。

『宇治拾遺物語』六〇

弟子等成奇云、此御病體非普通事。有令思給事歟。不被仰者、自他無由事也云。

『古事談』一九一

以上の他に、「いはく」の例は、『宇治拾遺物語』六〇に2

例、六三話に1例、六九例に1例、一三五話に1例がある

(増補の例)

僧正のいはく「いかなりとも、なじかは、はさまぬやうやある

べき。投げやるとも、はさみ食ひてん」とありければ、

『宇治拾遺物語』六九

僧正、イカナリトモ、ナジカハ八サマヌ様ハアルベキ。投遣トモハサミ食テントアリケレバ、

一方、「いふやう」は、『宇治拾遺物語』で増補した例が1例、『古事談』の「曰」を翻案した例が1例見られる。

(増補の例)

されども、この女な、おそるゝけしきなくして、いふやう、
「年来たのみたてまつる心ざし浅からず。なに事にさぶらふとも、いかでか仰られん事、そむきたてまつらん。御身くづおほ」
「ほ」れさせ給はざりしさに、などが仰せられざりし」といふ時に、

『宇治拾遺物語』六〇

然而此女敢無怖畏之氣、年来奉憑之志、不淺。雖何事候争不奉貴命哉。如此御身クツラレサセ不給之前、ナド力不被仰哉云。

『古事談』一九一

(翻案の例)

念珠をとりて、を「お」しもみていふ様、「うれしく、来らせ給たり。中略」僧を生ませたまはば、法務の大僧正を生せ給へ、「といひお」を「はりて、すなはち死ぬ。

『宇治拾遺物語』六〇

執念珠ヲシモミテ曰、ウレシク令來給タリ。 中略) 僧ヲ令生
給ハ法務大僧正ヲ生給ベシト祈畢。 即以命終云云。

(『古事談』一九一)

『宇治拾遺物語』全体で見ると、「いはく」47例、「いふやう」139例
であって、全体に「いふやう」の使用が大きく勝っている。また
『今昔物語集』との類話で見ると、『今昔物語集』が「云ク」を用い
る箇所が『宇治拾遺物語』が「いふやう」をとる例が3例(五六・
一八三・一八五)あるが、『今昔物語集』が「云フ様」を用いる箇
所で『宇治拾遺物語』が「いはく」「いふやう」をとる例はない。
ところが、『古事談』との比較で言えば、「いはく」の使用は、『古
事談』の表現を踏襲した例が全体で9例あるのに対して、増補箇所
には1例用いているのみである。用例の多い『宇治拾遺物語』六〇
話をとりあげると、『古事談』の「云」を踏襲した箇所に「いは
く」を用いた例が3例あるのに対して、増補の箇所と、『古事談』
の「曰」を翻案した箇所に「いふやう」を用いた例が各1例ずつ見
られる。『古事談』以外での「いはく」の例は出典未詳話の例が多
いのであるが、このような『古事談』の翻案状況から考えると
「いはく」の使用は出典の表現の踏襲によって用いる例が多いと推
測される。「いはく」の用例は、中古の物語でも和文調の強い『伊
勢物語』に「いはく」1例、「いふやう」1例(「たばかりたまふや

う」の形)、大和物語』で「いはく」0例、「いふやう」9例(「い
ひけるやう」「申すやう」「仰せたまふやう」を含む)、『源氏物語』
で「いふやう」4例、「いはく」0例のような状況で用例は少ない
のであるが、漢文訓読調の強い『竹取物語』で「いはく」30例、
「いふやう」7例、『大鏡』で「いはく」1例、「いふやう」9例、
『宇津保物語』で「いはく」8例、「いふやう」13例が見られる。
『宇治拾遺物語』のように多くの例を用いるのは和文体の文章とし
ては新しい傾向といえようが、『古事談』による説話では出典の踏
襲による例が大半であることから考えると、出典の内容を忠実に受
け継ぐことに重点があつたために、漢文訓読特有語を踏襲する場合
があつたのではないかと思われる。

三 むすび

以上見たように、『古事談』との比較で見ると限りでは、『宇治拾遺
物語』の語彙・語法は、旧来の平仮名による和文体に用いられてい
る範囲を大きく出るとはならない。しかし、語法的な面では、「あ
ひだ」「ところ」「や」「いはく」など、『古事談』の影響で用いた変体
漢文や漢文訓読文の要素が含まれている点も、見逃せない。『古事
談』に用いられた語彙・語法のうちで、和文体にも用いられるもの
は、『宇治拾遺物語』にも踏襲される傾向があるが、難解なものにつ

いては平易な和語に変換しようとしており、全体としては和文体の表現に置き換える意識はかなり強いと思われる。

右の考察によって、『宇治拾遺物語』の語彙・語法は、基本的には和文体を意識したものであり、例外的に含まれる変体漢文や漢文訓読文の語法は、翻案の過程で、『古事談』の要素を直接取り入れた場合が中心であることがわかった。このように、漢文的な文献を資料にして和文(平仮名文)が書かれる機会が多くなったのは、中世の和文体の質の変化をもたらず要因の一つになったと言えるのではないか。『宇治拾遺物語』では和文体を基本としつつも、漢文訓読文の要素が混じる要因は、和文体を基調とする文体を用いながらも、このような出典の内容の忠実に踏襲しようとしていることが大きい。『宇治拾遺物語』の場合、すべてを和文体の用語に改変したのではなく、和文体にもなじみやすい変体漢文や漢文訓読文の用語の一部が踏襲された結果として、『宇治拾遺物語』に和漢混交現象が見られるようになったと解することができる。

本稿では、『古事談』を通して漢語や変体漢文特有語・漢文訓読特有語などの翻案の状況を考察したが、文体に関わる語彙である漢語全体の様相や、さらに漢字表記との関わりなども重要な問題である。特に名詞類の漢語については、漢字表記される漢語を出典から直接導入している点に注目すべきだが、本稿では十分考察をすこ

とができなかった。これについてはさらに検討したい。

注

- ① 山田俊雄「和漢の混淆」(『岩波講座 日本語』昭和五二年)
- ② 築島裕「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(東京大学出版会 昭和三八年)
- ③ 益田勝美「古事談と宇治拾遺物語の関係」(『日本文学史研究』昭和二五年七月)ただし、本稿で扱った話は、日本古典文学大系、新日本古典文学大系で同文の内容とされたものに限った。
- ④ 山岡敬和「聖と俗への志向——宇治拾遺物語編者の採録意識をめぐって——」(『國學院雑誌』昭和五九年三月)
- ⑤ 桜井光昭「敬語の表記から見た『宇治拾遺物語』の文体」(『国語語彙史の研究』十一 平成二年十二月)
- ⑥ 峰岸明「平安時代古記録の国語学的研究」(東京大学出版会 昭和六一年)を参照。
- ⑦ 「あひだ」で接続助詞的な用法と解せる例は、他に2例ある(一五話の出典未詳話と、二三話の今昔との類話)。
- ⑧ 「ところ」で接続助詞的な用法と解せる例は他に1例ある(一一三話の今昔との類話)。
- ⑨ 「やつ」の語法は「いふやつ」以外に「みるやつ」の例が2例あり、いずれも『古事談』の「見様」の踏襲の例である。